

(3) 東山小学校

学 校 長 岸本 教恵
校内研究代表者 池谷 亜紀

1. 研究主題

「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業づくり」
～自分の考えを表現することが楽しいと思える授業づくりを目指して～

2. 主題設定の理由

本校は昨年度から研究主題を「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業づくり～自分の考えを表現することが楽しいと思える授業づくりを目指して～」とし、これまで以上に児童の実態に即しながら研究を進めていった。まず、「明日も来たいと思う東山小」を合言葉に、全ての児童が安心して自己表現できる学級づくりのために、生徒指導の3機能、UDの視点を生かした授業や学級経営等について校内研修を行うとともに、全教員で共通理解を図った。そして、児童が自己を表現する楽しさを感じられるよう、外国語活動・外国語科において目的意識・相手意識を大切に、単元ゴールを明確化した言語活動の実施や、友だちと関わりコミュニケーションの楽しさを体験する場面設定や必然性を意識した授業展開を仕組んでいった。また、外国語活動・外国語科で培ってきた授業スタイルや研究の学びを国語科にも広げ、外国語活動と国語科において共通の視点を持ち、研究授業を通して授業の在り方を研究してきた。その結果、昨年度末に行った児童の外国語教育意識調査の結果は、全項目平均肯定的評価が84.6%と目標数値の80%を上回ることができた。なかでも「⑧英語で自分のことや意見を発表することが楽しい」の項目が、R2年度末と比較して4%上昇した。

そこで、今年度は、昨年度から引き続き研究主題を「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業づくり～自分の考えを表現することが楽しいと思える授業づくりを目指して～」とし、児童が自分の考えや気持ちを表現することが楽しいと思える授業づくりを目指し、以下の3点について実践した。

- (1) バックワードデザインで描く単元及び1時間の授業構成
 - ・「目的・場面・状況」を明確にした単元ゴールを設定することで、必然性のある言語活動を仕組む。
 - ・目標を達成した児童の姿を具体的に描いたうえで、単元及び1時間の授業を構想する。
 - (2) ねらいを達成するための中間指導の工夫
 - ・中間指導を工夫することで言語活動の充実を図り、見方・考え方を働かせて自分の思いや考えを主体的に表現しようとする児童を育成する。
 - (3) 外国語活動・外国語科の授業づくりを他教科へ広げる
 - ・外国語活動・外国語科の授業づくりを国語科を中心に他教科へと広げ、全教科を通して児童の表現力を伸ばす。

3. 研究の進め方と方法

(1) 運営

- ①研究推進委員会（月3回月曜日 管理職・研究主任）
- ②研究部会（学力部会・授業づくり部会・児童理解部会）
各部において企画された取り組みは、研究推進委員会等の承認を得る。
- ③学年部会（毎週金曜日）

(2) 校内研の持ち方

- ・研究日は毎水曜日（15:20～16:45）とする。（第2週…定例職員会）
- ・研究日は全教職員による全体研修と各研究部による研究部会等を行う。
- ・研究推進委員会で企画立案し、全体に提案し、共通理解を図り実践していく。

(3) 授業研究

○今年度は、1学期に4・5・6年生が外国語活動・外国語科の、2学期に1・2・3年生が国語

科の全校研究授業を行った。

【外国語活動・外国語科】

- ・「ねらいを達成するための中間指導の工夫」として、1時間の授業の中で言語活動の占める割合が少ないことや、形式的なやり取りに終始してしまう場合もあるということが課題として挙げられていたため、言語活動を充実させるために、より中間指導に焦点を当てた研究を進めていった。インプットなどの活動をメインとして授業づくりを行っていた「東山スタイル」から、「Do まずやってみる」「learn 中間指導」「Do again 再度やってみる」という右側の「新東山スタイル」の流れも取り入れ、言語活動の充実を図った。(図1参照)
- ・「Do-Learn-Do again」で授業を進めていく際、当該単元の目標や児童の実態に応じて中間指導における手立てが変わる。そのため、言語活動を充実させるための中間指導について内容面・言語面でまとめ、校内研において全教員で共有していった。(図2参照)
- ・外国語科・外国語活動の研究授業では、研究協議の視点を3本とも「ねらいを達成するための(言語活動を充実させるための) 中間指導になっているか」とし、研究をつなげていった。

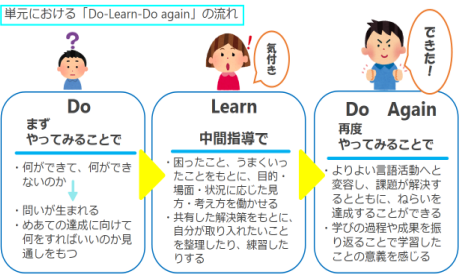


図1 「Do learn Do again」の流れ

☆内容面、言語面における中間指導例の共有

内容面	言語面
○代表の児童に教師(ほかの児童たち)が質問をすることで、再構築させる。 ○自身の学びをメタ認知させ、比較し、違いに気付かせる。 ・なぜそうしたのかな? ・自分に生かせることは何かな? ○英語で言いたかったのに言えなかったこと=困ったことを尋ねる	○言語面での誤りは、教師の(またはデジタル教科書の)正しい表現を聞かせ、気付きを促し、児童に一度は表現させる。 ○日本語を既習表現で言えないかを考えさせる。 ○ALTに尋ねさせる。 ○必要感をもたせて練習をする。

図2 内容面・言語面における中間指導の例について

【国語科】

- ・国語科では、領域を「話すこと・聞くこと」に絞り、「Do-Learn-Do again」の流れを取り入れ、単元をバックワードデザインで描くとともに、学習過程で単元を描くということも、確認をしていった。
- ・「まず、やってみる」ことで、自分事となる問いを引き出し、中間指導では、GOOD モデルの共有や、分からなかったことの共有を行ったことで、外国語活動・外国語科と同様、児童自らが気づき、言語活動の充実につながっていく場面もあったが、中間指導後に内省の時間が十分に取れず、自己決定させる場面が少なかったため、変容があまり見られなかったことも課題として挙げられた。

4. 今年度の取組

月	日	内容
4	4	○研究(研究主題・主題設定の理由・研究組織と運営・研究の進め方とその方法・校内研修年間計画)の提案・確認 ○「UDの視点を取り入れた東山小授業づくりのスタンダード」確認
	5	○「東山スタイル」「新東山スタイル」「授業スタンダード」の確認 ○外国語活動・外国語科年間指導計画・CAN-DOリスト・単元構成の仕方の確認 ○各研究部会(ねらい・年間計画) ○全国小学校英語教育実践研究会高知大会に向けて
	22	○各研究部会より(ねらい・年間計画提案・確認) ○授業改善プラン(取組の重点・中間目標)提案・確認 ○単元構成の仕方・授業力チェックシート・中村中学校区のきまりの確認
	27	※外国語活動指導案検討 5年1組
5	18	※外国語科研究授業 5年1組 (NEW HORIZON Elementary Unit 2「When is your birthday」?) ※研究協議 助言者 西部教育事務所 間 留美 指導主事 ○外国語教育「中間指導」「真正性」「個人化」「創造性」の確認 ○「主体的・対話的で深い学び」を実現するための学習課程の確認
6	1	※外国語活動指導案検討 4年1組
	16	※外国語活動研究授業 4年1組 (Let's Try! 2 Unit2「Let's play Cards.」)

		※研究協議 助言者 西部教育事務所 間 留美 指導主事 ○第1回外国語アンケート分析結果報告・改善策について
	22	※外国語科指導案検討 6年1組
	28	※外国語科研究授業 6年1組 (NEW HORIZON Elementary Unit 3「Let's go to Italy.」) ※研究協議 助言者 西部教育事務所 間 留美 指導主事
7	6	○標準学力調査、全国学力状況調査分析結果報告・改善策
	22	○研究主題を達成するための1学期の取組振り返り ○研究部会 (1学期の取組の反省)
	28	○授業改善プラン (中間検証・年度末目標) 提案・確認 ○2学期の取組の提案 (研究主任・各研究部会より)
8	25	○授業改善プラン (中間検証・年度末目標) 提案・確認 ○各種学力調査を受けた全学年共通の取組 (研究主任より) ○2学期の取組の確認 (研究主任・各研究部会より) ○全国小学校英語教育実践研究会高知大会に向けて
9	28	※国語科指導案検討 3年1組
10	17	※国語科研究授業 3年1組 (教材名「話したいな、わたしの好きな時間」) ※研究協議 助言者 西部教育事務所 間 留美 指導主事
	26	※国語科指導案検討 2年2組
11	2	※国語科研究授業 2年2組 (教材名「たからものをしょうかいしよう」) ※研究協議
	16	※国語科指導案検討 1年2組 ○外国語アンケート (第2回) 分析結果・改善策について
	30	※国語科研究授業 1年2組 (教材名「なにに 見えるかな」) ※研究協議 助言者 西部教育事務所 間 留美 指導主事
12	2	○研究部会 (2学期の取組の集約・研究集録用様式検討)
1	11	○3学期の取組 (研究部会より) ○研究集録用様式提案 (研究部会・各担当より ○オール四万十実践交流会発表資料提案○高知県学力定着状況調査校内分析結果・改善策
	19	○全国小学校英語教育実践研究会高知大会について
2	1	○研究部会 (今年度の集約)
	22	○第3回外国語アンケート分析結果報告・改善策 ○授業改善プラン (年度末検証) の確認
3	15	○来年度の研究の方向性提案 (研究テーマ・研究組織等) ○来年度の方向性提案 (各研究部会の取組) ○来年度の教育計画について

5. 成果と課題 (成果○ 課題●)

- 全校研究授業の際、協議の視点を統一し「Do Learn Do again」を意識した授業展開を進めていったことで、言語活動を充実させるための中間指導の工夫について、理解を深めることができた。また、国語科を中心に他教科でも行うことで、児童と共に授業を創る視点が広がったように感じた。
- 学習指導要領を確認したことで、教科における見方・考え方を働かせている児童の姿が明確になった。また、各学年の系統性などが分かった。
- 国語科の研究授業について、領域を「話すこと・聞くこと」に絞ったことで系統性がより分かりやすかった。また、研究授業の際、担当を割り振って児童の様子を見るようにしたことで、児童の変化を基に協議をすることができた。
- 中間指導後に内省の時間が十分に取れず、自己決定させる場面が少なかったため、変容があまり見られなかった場面があった。中間指導や振り返りで内省の時間を十分に確保し、自分の考えを再構築させるということ、内容面だけでなく言語面でも指導を行うということについては課題が残る。
- 外国語科・外国語活動については、専科教員が担当する教科を研究の柱の教科とすることの難しさを感じた。また、苦手意識のある児童への適切な支援が必要である。
- 外国語活動・外国語科の研究は引き続き進めていき、国語科及び算数科等、学力向上に課題のある教科の研究も進めていく必要性を感じる。